

青森県内出土中世馬の動物考古学的研究

弘前大学人文社会科学部 植月 学

八戸市根城跡と平川市大光寺新城跡より出土した中世馬遺体について、体高・年齢推定、解体痕、古病理学的観察をおこない、飼育、利用法について検討した。

両遺跡の特徴として二歳未満の幼若齢個体が多い点が挙げられ、武家居館内での馬の飼育を示唆する。鎌倉市由比ヶ浜集団墓地遺跡では良好な遺存状態にも関わらず、上記年齢群を欠いていた。以上は生産・消費地（青森）と消費地（鎌倉）における差異を示す。

乗馬の痕跡である下顎第二前臼歯のハミ痕は複数の個体で確認できたが、高率で出現した由比ヶ浜に比べるとやや少なかった。四肢への負荷の大きさを示す中手・中足骨靱帯の骨化程度は特に中手骨において由比ヶ浜に比べて顕著であり、より過重な労働に従事していたと推定される。体高についても大光寺新城は由比ヶ浜よりもばらつきが大きく、かつ小型の個体が多かった。両遺跡と由比ヶ浜では馬の用途や使役方法などにも違いが存在した可能性がある。

大光寺新城跡では解体痕や骨髓抽出のための四肢骨の打割が確認でき、馬産地における馬の常食とも解釈できる。一方で、根城ではこうした痕跡が確認できなかった。また、近世農民の例ではあるが、飢饉関連の文献記録からは牛馬肉食の激しい忌避も読み取れる。大光寺新城の馬肉食についても、籠城時など非常時における行為の可能性も検討していく必要がある。

本研究はJSPS科研費JP18H00733の助成を受けたものです。